

## 青年期における親密な関係の若者間の暴力被害に関連する 要因について

<sup>1)</sup> 鳥取大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程 (主任 吉岡伸一教授)

<sup>2)</sup> 鳥取大学医学部保健学科地域・精神看護学講座

藤原美智子<sup>1,2)</sup>, 吉岡伸一<sup>2)</sup>

## A study of relevant factors of violence victimization between intimate partners in adolescence

Michiko FUJIHARA<sup>1,2)</sup>, Shin-ichi YOSHIOKA<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> *Doctoral Course, Graduate School of Medical Sciences Course of Health Science,  
Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*

<sup>2)</sup> *Department of Nursing Care Environment and Mental Health, School of Health Science,  
Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*

### ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate relevant factors of violence between intimate partners in adolescence, which is called dating violence. Participants included students of one university and two nursing vocational schools. The survey was conducted using self-reported questionnaires, including knowledge and cognition about dating violence, recognition of violence, tolerant attitudes toward violence, gender role consciousness, communication skills, mental health condition, and experience of dating violence victimization. A total of 536 responses out of the 581 obtained were regarded as valid, and then analyzed. As a result, 186 persons had experienced at least one act of dating violence from the scale. Concerning the relationships between experiencing dating-violence victimization and related factors, the tolerant attitudes toward violence was strongly related to the experience, while the knowledge of dating violence, consciousness of violence, gender role, and communication skills had little relation to the experience. In addition, students suffering from dating violence had a poor mental health condition. Social and economical violence, especially, had influenced the students' mental health states rather than physical, mental and sexual violence. In conclusion, the present results suggested that the consciousness which admits the violence is related to violence victimization. Moreover, mental health care is necessary for adolescents suffering from dating violence.

(Accepted on January 6, 2014)

**Key words :** dating violence, adolescence, recognition of violence, tolerant attitudes toward violence, mental health

## はじめに

近年、青年期の若者において、親密な関係の男女間で起こる暴力被害が問題となっている。配偶者間の暴力をドメスティックバイオレンス (domestic violence : DV) と呼ぶのに対し、青年期の男女間の暴力は、総称してデートDV (dating violence)・デートバイオレンスと呼ばれている。富安と鈴井<sup>1)</sup>はデートバイオレンスを提唱し、親密な関係であると認識している婚姻外の男女間での身体的、性的、心理的、社会的、経済的な要因に基づく多様な暴力行為とした。デートDVという表現は、date domestic violenceからきているため、婚姻外と内を含む表現で、厳密には適訳ではないが、マスコミ等でも一般的に用いられており、本研究ではデートDVという表現を使用した。

内閣府の調査(平成23年度)<sup>2)</sup>によると、「10歳代、20歳代の頃の際際相手から暴力を受けたことがある」という回答をした女性は13.7%、男性は5.8%で、青年期における若者の被害経験は決して少なくない。配偶者間と比較し、関係性がはっきりしない青年期の親密な関係の間での暴力については、被害が表面化しにくいことから、実態の把握や被害者の救済が困難である。また、2001年に制定されたいわゆるDV法は、婚姻関係にある者のみを対象としており、恋人間の暴力への対応が問題となっていたが、2013年6月によりやく交際相手(同居中またはかつて同居していた)にも適用を広げる法改正が行われたところであり、被害者への対応が急務とされる。

幼少期に虐待を受けた経験や、家族が虐待を受ける様子を見て育った経験が、将来的にデートDVやDVの加害や被害に繋がりがやすく<sup>34)</sup>、養育環境や親の養育態度が重要である。一方、教育による積極的な予防活動も被害や加害防止に向けて重要とされている。さらに、デートDVは、将来的にDVへ移行する可能性があり、若者が男女交際を行う時期の教育は、特に求められている。ところで、デートDV防止のための教育は1980年代からアメリカで始まり、日本では2000年頃に導入され、行政や民間機関が主体となって実施されている<sup>5)</sup>。教育プログラムの効果について、海外では、加害行為の行動変容が見られるなどの効果が検証されているが、日本では、信頼性・妥当性の高い尺度を用いて量的に分析した研究は少ない<sup>5)</sup>。

デートDV被害に関連する要因として、ジェンダー意識、性別役割分業観、暴力を容認する意識、自己主張力や人権意識の低さという個人特性等が報告されている<sup>68)</sup>。しかし、デートDVの評価尺度やそれらの結果も一定したものが得られていない現状にある。誰にも相談できず1人で抱え込み悩む被害者も少なくなく、被害の実態やその関連要因を明らかにすることは重要である。

今回、若者の暴力被害の実態を明らかにし、また、被害者の支援対策に向けての基礎資料を提供することを目的として、教育や介入が可能と考えられる、知識、コミュニケーション・スキル、ジェンダー意識および暴力に対する認識や暴力を容認する意識が、親密な若者間の暴力被害にどのような関連があるのかについて調査した。さらに、実際の被害経験が精神健康面に与える影響についても検討した。なお、本研究では、デートDVを、「婚姻関係にない若い恋人間で起こり、身体的・精神的・性的・社会的・経済的な手段を用い、力のある者が力のない者を支配する関係を定着させるもの」「親密さを逆手にした『相手から同意を得られていない』もしくは『相手が望まない』不当な行為の押しつけ」と定義した<sup>9,10)</sup>。また、「恋人から身体的・精神的・性的・社会的・経済的な手段を用いて支配されたか、暴力行為を一度でも受けたことのある者」をデートDV被害者とした。一般的に加害者が男性、被害者が女性というイメージが強いが、女性が加害者となる場合や男性が被害者となることもあるため、本研究では性別を限定しなかった。

## 対象と方法

### 1. 対象

A県内の承諾の得られたT大学の医学部保健学科看護学専攻と検査技術科学専攻、生命科学科、農学部、地域学部、工学部の学生、およびB・C看護専門学校の学生を対象とした。

### 2. 調査方法

調査は平成24年7月3日から7月30日に、無記名自記式の質問紙法により実施した。担当教員の了解が得られた講義終了後に説明して、質問票を配布または、学校の代表者に配布回収を依頼した。なお、回答後は質問票を封筒に入れてもらい回収した。

### 3. 調査内容

## 1) 基本属性

対象者について、基本的属性（年齢、性別、住環境）について調査した。

## 2) デートDVに関する知識

デートDVについての知識について、「言葉も内容も知っている」「言葉は知っているが内容は知らない」「言葉も内容も知らない」の3つの選択肢から回答を求めた。

## 3) 暴力に対する認識

暴力に対する認識は、高田<sup>10)</sup>のデートDVの定義をもとに、中岡と寺橋<sup>7)</sup>のデートDVの項目、野口<sup>11)</sup>のDVの実態に関する項目および山本<sup>9)</sup>のDV視度を参考に、11項目からなる暴力認識度を作成し、評価した。設問項目は、①身体的暴力（「ケガになるほど殴ったりけったりする」「押ししたり、つかんだり、つねったり、こぶいたりする」）、②社会的暴力（「外出や友好関係をチェックする」「行動を制限したり監視したりする」「相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める」）、③精神的暴力（「腹をたてた時、大声でどなる」「わざと嫌な呼び名で呼んだり、バカにしたり、見下したような言い方をする」「何を言っても無視をする」）、④経済的暴力（「お金を貸しても返さない」）、⑤性的暴力（「無理やり性的な行為をする」「避妊に協力しない」）であった。回答方法は3件法とし、「どんな場合も暴力にあたる」を2点、「暴力にあたる場合も、そうでない場合もある」を1点、「暴力にあたるとは思わない」を0点とし、合計点数を出した。

## 4) 暴力を容認する意識

暴力を容認する意識は、中岡と寺橋<sup>7)</sup>の暴力容認度を参考に、9項目からなる暴力許容度を作成し、評価した。設問項目は、「軽く叩く程度なら問題ない」「おだやかに説明してもわからなければ、どなってもいい」「行動の制限など、相手の束縛も愛情表現の一つだと思う」「愛し合っているならば、相手の携帯電話の着信履歴やメールを無断でチェックしてもよい」「暴力をふるわれるのは、ふるわれる方にも原因があるからだ」「暴力をふるっても、謝れば許すべきだ」「どなったりすることは性格だから仕方ない」「経済的な支援を受けていれば少々のことは我慢すべきだ」「しつけ目的として親が子どもに暴力をふるうのは仕方がない」とした。回答方法は、4件法とし、「大変そう思う」から「全く思わない」の4段階で3-0点

とし、合計得点を出した。

## 5) ジェンダー意識

ジェンダー意識は、中岡と寺橋<sup>7)</sup>のジェンダー意識4項目を、「男性と女性で賃金に差があるのはおかしい」「男は男らしく、女は女らしくふるまうべきだ」「女性は男性の意見に従うべき」「女が家事・育児を担当するのがよい」に一部修正したジェンダー意識度を作成し、評価した。回答方法は4件法とし、「大変そう思う」から「全く思わない」での4段階で0-3点とし、合計得点を出した。

## 6) コミュニケーション・スキル

コミュニケーション・スキルは、藤本と大坊<sup>12)</sup>によるコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）、および相川と藤田<sup>13)</sup>の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度、町田<sup>14)</sup>のコミュニケーション遂行能力を参考に、12項目からなる以下のコミュニケーション・スキル度を作成し、評価した。①自己統制（「自分の感情をコントロールする」「善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する」）、②表現力（「伝えたいことを言葉で表現する」「自分の感情を素直に表現する」）、③解読力（「相手の感情や心理状態を察する」「その場の雰囲気を読む」）、④自己主張（「周りとは関係なく自分の意見や考えを伝える」「自分が不愉快な思いをさせられた時には、はっきり苦情を言う」）、⑤他者受容（「相手の意見や立場に共感する」「相手の意見や立場を尊重する」）、⑥関係維持（「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」「周りの人たちとの間でトラブルが起きても上手に処理する」）で、回答方法は7件法とし、「かなり得意」から「かなり苦手」での7段階で7点-1点とし、合計得点を出した。

## 7) 精神健康度

被害による精神健康状態への影響を把握するため、Goldbergによる一般精神健調査30項目版<sup>15)</sup>（以下、GHQ30）を使用した。採点は0-0-1-1とする2件法採点のGHQ法を用い、得点が高いほど精神的に不健康であることを示す。また、カットオフポイントは、青年期の対象者に用いられている、12/13点を用いた<sup>16)</sup>。

## 8) 暴力被害の実態

暴力被害の実態は、恋人からデートDV（身体的・精神的・性的・社会的・経済的な手段での支配）を受けた経験を把握するために、前述した暴力認識度に「命の危険を感じるほどの暴力をされ

表1 暴力に対する認識

暴力認識度の11項目	暴力にあたる とは思わない	暴力にあたる 場合もある	どんな場合でも 暴力にあたる	総計
1.ケガになるほど、殴ったりけったりする	0	29(5.4)	507(94.6)	536
2.押ししたり、つかんだり、つねったり、こぶいたりする	14(2.6)	376(70.3)	145(27.1)	535
3.外出や友好関係をチェックする（携帯電話の着信履歴やメールなど）	91(17.0)	301(56.1)	144(26.9)	536
4.行動を制限したり監視したりする	52(9.7)	189(35.3)	294(55.0)	535
5.相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める	97(18.1)	292(54.5)	147(27.4)	536
6.腹を立てた時、大声でどなる	40(7.5)	271(50.5)	225(42.0)	536
7.わざと嫌な呼び名で呼んだり、バカにしたり見下したような言い方をする	41(7.7)	242(45.2)	252(47.1)	535
8.何を言っても無視をする	49(9.1)	202(37.8)	284(53.1)	535
9.お金を貸しても返さない	80(14.9)	121(22.6)	335(62.5)	536
10.無理やり性的な行為をする	1(0.2)	30(5.6)	505(94.2)	536
11.避妊に協力しない	12(2.2)	64(11.9)	460(85.9)	536

人数(%)

る」を追加した12項目からなる暴力被害状況度を作成し、評価した。回答方法は4件法とし、「いつも」「ときどき」「たまに」「まったくない」の4段階で3-0点とした。

#### 4. 分析方法

統計パッケージSPSS ver.19 for Windowsを用いて、デートDVの知識は $\chi^2$ 検定、それ以外の項目はMann-WhitneyのU検定およびKruskal-Wallisの検定を用いた。また各項目の関係にはSpearmanの順位相関係数を用いた。また、尺度の信頼性分析はCronbachの $\alpha$ 係数により算出した。なお、有意確率5%以下を統計学的有意差ありとした。

#### 5. 倫理的配慮

対象者に、研究目的・方法・守秘義務を紙面ならびに口頭で説明し、協力は本人の自由意思で行い、協力しなくても何ら不利益を受けることはないこと、結果は個別ではなく全体として統計処理を行い考察し、雑誌投稿を行うこと、その際個人が特定されることは決してないことを伝えた。なお本研究は鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号1940）。

## 結 果

### 1. 基本属性

配布した質問票631のうち、回収できた質問票

は白紙5部を含み580(回収率91.9%)で、このうち、回答が不十分なものを取り除いた有効回答は536であった。回答者の性別は、男性150名(28.0%)、女性386名(72.0%)で、平均年齢は20.2 ± 2.72歳(平均値 ± 標準偏差、以下同様)であった。住環境は、実家生114名(21.3%)、一人暮らし370名(69.0%)、親類と同居10名(1.9%)、恋人と同居5名(0.9%)、寮その他37名(6.9%)であった。536名のうち、恋人と呼べるような人が現在または過去にいる人は348名(65.0%)であった。

### 2. 尺度の信頼性係数

各項目の信頼性係数は、暴力認識度は $\alpha = 0.755$ 、暴力許容度は $\alpha = 0.746$ 、コミュニケーション・スキル度は $\alpha = 0.756$ 、ジェンダー意識度は $\alpha = 0.780$ 、被害状況度は $\alpha = 0.776$ 、GHQ30は $\alpha = 0.740$ であった。

### 3. デートDVに関する知識

「言葉も内容も知っている」が302名(56.3%)、「言葉は知っている」が129名(24.1%)、「言葉も内容も知らない」が105名(19.6%)であった。

### 4. 暴力に対する認識

表1に暴力認識度の結果を示す。暴力に相当することを「暴力にあたるとは思わない」と判断した人が多かったのは、「相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める」18.1%、「外出や友好関係をチェックする（メールや履歴）」17.0%、「お

表2 暴力を容認する意識

暴力許容度の9項目	全く 思わない	あまり 思わない	やや そう思う	大変 そう思う	総計
1.軽く叩く程度なら、特に問題ない	20(3.7)	86(16.1)	339(63.2)	91(17.0)	536
2.おだやかに説明してもわからなければ、どなってもいい	161(30.0)	288(53.7)	77(14.4)	10(1.9)	536
3.行動の制限など、相手の束縛も愛情表現の一つだと思ふ	148(27.7)	238(44.5)	137(25.6)	12(2.2)	535
4.愛し合っていれば、相手の携帯電話の着信履歴やメールを無断でチェックしてもよい	306(57.1)	193(36.0)	35(6.5)	2(0.4)	536
5.暴力をふるわれるのは、ふるわれる方にも原因があるからだ	175(32.6)	263(49.1)	92(17.2)	6(1.1)	536
6.暴力をふるっても、謝れば許すべきだ	222(41.4)	253(47.2)	56(10.5)	5(0.9)	536
7.どなったりすることは性格だから仕方ない	172(32.1)	270(50.3)	91(17.0)	3(0.6)	536
8.経済的な支援を受けていれば少々のは我慢すべきだ	216(40.3)	251(46.8)	62(11.6)	7(1.3)	536
9.しつけ目的として親が子どもに暴力をふるうのは仕方がない	204(38.1)	191(35.7)	123(23.0)	17(3.2)	535

人数(%)

表3 ジェンダー意識

	大変 そう思う	やや そう思う	あまり 思わない	全く 思わない	総計
男性と女性で賃金に差があるのはおかしい	232(43.3)	220(41.0)	69(12.9)	15(2.8)	536
男は男らしく、女は女らしくふるまうべきだ	24(4.5)	153(28.5)	281(52.4)	78(14.6)	536
女性は男性の意見に従うべき	2(0.4)	23(4.3)	159(29.7)	352(65.6)	536
女が家事・育児を担当するのがよい	10(1.9)	108(20.1)	246(45.9)	172(32.1)	536

人数(%)

金を貸しても返さない」14.9%であった。また、「暴力にあたる場合もある」を選んだ人が多かったのは、「押しつたり、つかんだり、つねつたり、こぶいたりする」70.3%、「外出や友好関係をチェックする（メールや履歴）」56.1%、「相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める」54.5%、「腹を立てた時、大声でどなる」50.5%であった。

5. 暴力を容認する意識

暴力許容度の結果を表2に示す。暴力を容認する内容を、「大変そう思う」「ややそう思う」と肯定した人が多かったのは、「軽くたたく程度なら、特に問題ない」80.2%、「行動の制限など、束縛も愛情表現の一つだと思ふ」27.8%、「しつけ目的として親が子どもに暴力をふるうのは仕方がない」26.2%であった。

6. ジェンダー意識

ジェンダー意識の結果を表3に示す。昔からの性別役割意識を持っている者、すなわち、「男性と女性で賃金に差があるのはおかしい」を否定する者が15.7%、「男は男らしく、女は女らしくふるまうべきだ」を肯定する者が33.0%、「女性は男性の意見に従うべき」を肯定する者が4.7%、「女が家事・育児を担当するのがよい」を肯定する者が22.0%であった。

7. コミュニケーション・スキル

コミュニケーション・スキル度の結果を表4に示す。若者のコミュニケーション・スキル得点の平均を見ると、全体の12項目平均4.40と比較し、関係維持や他者受容で得点が高く、表現力と自己主張で得点が低かった。

8. 精神健康度

GHQ30の合計得点の平均値・標準偏差は9.5 ±

表4 コミュニケーション・スキル得点

質問項目		有効度数	欠損数	平均点	標準偏差
自己統制	1) 自分の感情をコントロールする	536	0	4.46	1.31
	2) 善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する	536	0	4.82	1.07
表現力	3) 伝えたいことを言葉で表現する	535	1	3.87	1.33
	4) 自分の感情を素直に表現する	534	2	3.96	1.47
読解力	5) 相手の感情や心理状態を察する	536	0	4.71	1.18
	6) その場の雰囲気を読む	533	3	4.73	1.17
自己主張	7) 周りとは関係なく自分の意見や考えを伝える	535	1	3.84	1.34
	8) 自分が不愉快な思いをさせられた時には、はっきり苦情を言う	534	2	3.63	1.35
他者受容	9) 相手の意見や立場に共感する	536	0	4.82	1.04
	10) 相手の意見や立場を尊重する	534	2	4.90	1.03
関係維持	11) 人間関係を良好な状態に維持するように心がける	536	0	4.99	1.12
	12) 周りの人たちとの間でトラブルが起きてても上手に処理する	535	1	4.19	1.07

表5 暴力被害の関連因子間の相関

	1	2	3	4	5	6
1. デートDVに関する知識						
2. 暴力認識度	0.165**					
3. 暴力許容度	-0.110*	-0.318**				
4. ジェンダー意識度	-0.093*	-0.182**	0.386**			
5. コミュニケーション・スキル度	0.122**	0.114**	-0.044	-0.061		
6. 精神健康度	0.026	0.057	0.066	0.031	-0.188**	

Spearmanの順位相関係数の検定. \*:p < 0.05, \*\*:p < 0.01.

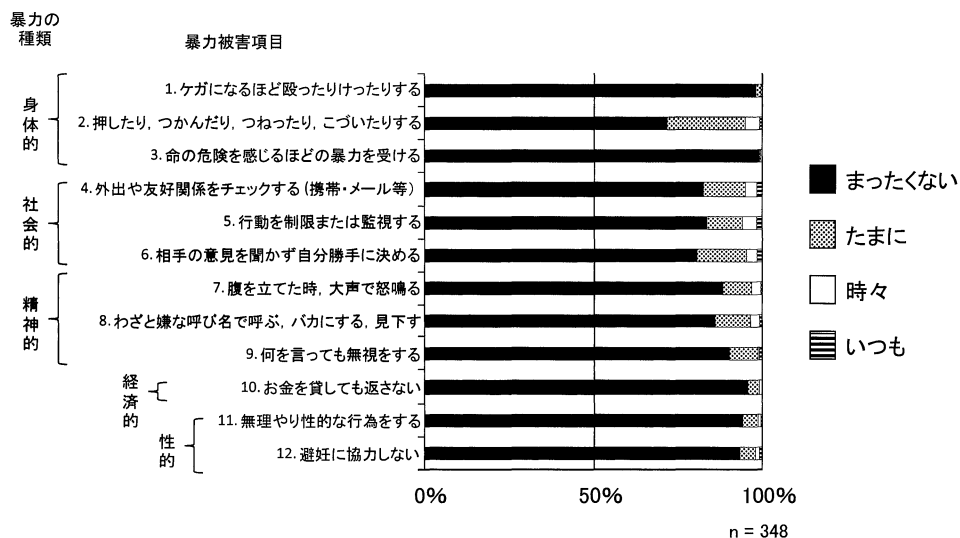


図1 暴力被害の状況

表6 暴力被害状況と各項目との関連

暴力の種類	被害状況度の12項目	経験有無	デートDVに関する知識						暴力認識度			暴力許容度			
			知っている		言葉だけ		知らない		p	m	SD	p	m	SD	p
			人数	%	人数	%	人数	%							
身体的	1) ケガになるほど殴ったりけったりする	あり	4	2.0	1	1.3	2	3.1	.741	15.7	4.92	.948	10.0	4.44	.219
		なし	200	98.0	78	98.7	63	96.9		16.1	4.08		8.1	3.69	
	2) 押したりつかんだりつねったりこづいたりする	あり	60	29.4	20	25.3	19	29.2	.781	15.1	4.30	.005**	9.4	3.43	.000**
	なし	144	70.6	59	74.7	46	70.8		16.5	3.95		7.6	3.71		
社会的	3) 命の危険を感じるほどの暴力をされる	あり	2	1.0	0	0.0	1	1.5	.586	19.7	1.53	.083	11.3	4.62	.169
		なし	202	99.0	79	100.0	64	98.5		16.1	4.10		8.1	3.70	
	4) 外出や友好関係のチェック(メール等)	あり	43	21.1	10	12.7	8	12.3	.116	15.4	4.22	.101	9.3	3.57	.004**
	なし	161	78.9	69	87.3	57	87.7		16.3	4.06		7.9	3.69		
精神的	5) 行動を制限したり監視したりする	あり	38	18.6	9	11.4	10	15.4	.327	14.9	4.44	.018*	9.6	3.91	.004**
		なし	166	81.4	70	88.6	55	84.6		16.3	3.99		7.9	3.61	
	6) 相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める	あり	42	20.6	13	16.5	13	20.0	.730	16.0	3.76	.631	8.8	3.35	.106
	なし	162	79.4	66	83.5	52	80.0		16.1	4.18		8.0	3.78		
経済的	7) 腹を立てた時、大声でどなる	あり	29	14.2	5	6.3	6	9.2	.143	15.3	4.70	.353	9.5	3.71	.006**
		なし	175	85.8	74	93.7	59	90.8		16.2	4.01		8.0	3.68	
	8) わざと嫌な呼び名で呼んだり、ばかにしたり、見下した言い方をする	あり	33	16.2	7	8.9	8	12.3	.258	14.7	4.56	.022*	9.6	3.05	.002**
	なし	171	83.8	72	91.1	57	87.7		16.3	3.97		7.9	3.76		
性的	9) 何を言っても無視をする	あり	24	11.8	2	2.5	8	12.3	.048*	15.1	4.62	.194	9.0	3.42	.158
		なし	180	88.2	77	97.5	57	87.7		16.2	4.02		8.0	3.73	
	10) お金を貸しても返さない	あり	11	5.4	2	2.5	2	3.1	.491	17.7	3.42	.114	6.9	2.03	.125
	なし	193	94.6	77	97.5	63	96.9		16.0	4.11		8.2	3.76		
性的	11) 無理やり性的な行為をする	あり	15	7.4	2	2.5	3	4.6	.268	16.7	4.48	.341	8.7	4.31	.468
		なし	189	92.6	77	97.5	62	95.4		16.1	4.07		8.1	3.67	
	12) 避妊に協力しない	あり	20	9.8	2	2.5	1	1.6	.017*	16.0	4.44	.930	8.5	4.23	.578
	なし	184	90.2	77	97.5	63	98.4		16.1	4.08		8.1	3.68		
スコア全体の平均値	あり	110	53.9	38	48.1	35	53.8	.662	15.8	4.10	.102	8.8	3.55	.000**	
	なし	94	46.1	41	51.9	30	46.2		16.5	4.07		7.4	3.75		

暴力の種類	被害状況度の12項目	ジェンダー意識度			コミュニケーション・スキル度			精神健康度		
		m	SD	p	m	SD	p	m	SD	p
身体的	1) ケガになるほど殴ったりけったりする	4.0	3.16	.607	52.3	6.78	.730	11.4	5.32	.332
		3.3	2.02		53.9	9.05		9.6	6.33	
	2) 押ししたりつかんだりつねったりこづいたりする	3.5	2.22	.121	53.9	8.88	.920	9.7	5.57	.575
	3.2	1.97		53.9	9.08		9.6	6.60		
社会的	3) 命の危険を感じるほどの暴力をされる	7.0	1.73	.010*	53.3	5.03	.968	13.7	3.22	.173
		3.2	2.02		53.9	9.04		9.6	6.32	
	4) 外出や友好関係のチェック(メール等)	3.0	2.09	.159	54.0	8.23	.518	11.6	6.84	.013*
	3.3	2.03		53.8	9.18		9.2	6.13		
精神的	5) 行動を制限したり監視したりする	3.3	2.18	.967	54.2	9.01	.554	12.0	6.08	.001**
		3.3	2.02		53.8	9.02		9.2	6.27	
	6) 相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める	3.8	2.09	.015*	53.4	7.63	.863	10.7	6.24	.099
	3.1	2.02		54.0	9.32		9.4	6.32		
性的	7) 腹を立てた時、大声でどなる	3.4	2.15	.594	52.7	8.44	.490	10.3	6.19	.387
		3.2	2.03		54.0	9.08		9.5	6.33	
	8) わざと嫌な呼び名で呼んだり、ばかにしたり、見下した言い方をする	3.5	2.22	.503	53.1	9.09	.677	10.5	5.89	.224
	3.2	2.02		54.0	9.01		9.5	6.38		
経済的	9) 何を言っても無視をする	3.6	2.19	.337	53.3	8.51	.936	11.4	6.62	.105
		3.2	2.03		53.9	9.07		9.4	6.26	
	10) お金を貸しても返さない	2.8	2.46	.261	53.5	6.30	.990	13.5	5.95	.013*
	3.3	2.03		53.9	9.12		9.5	6.28		
性的	11) 無理やり性的な行為をする	3.4	2.32	.889	57.1	8.13	.045*	10.8	6.45	.313
		3.3	2.03		53.7	9.03		9.6	6.31	
	12) 避妊に協力しない	3.0	2.22	.498	54.9	8.83	.524	10.4	6.12	.406
	3.3	2.03		53.8	9.04		9.6	6.34		
スコア全体の平均値	あり	3.4	2.13	.126	53.7	8.50	.756	10.2	5.86	.083
	なし	3.1	1.94		54.0	9.57		9.0	6.75	

統計処理は、デートDVの知識は $\chi^2$ 乗検定。それ以外はMann WhitneyのU検定。  
m: 平均値, SD: 標準偏差。\*: p < 0.05, \*\*: p < 0.01.

6.31であった。カットオフポイントの13点以上は、536名中152名（28.4%）であった。

#### 9. 関連因子の相関関係

デートDVに関する知識、暴力認識度、暴力許容度、ジェンダー意識度、コミュニケーション・スキル度、精神健康度の相関関係を表5に示す。デートDVの知識は、暴力認識度、コミュニケーション・スキル度と正の相関が、暴力許容度、ジェンダー意識度と負の相関がみられた。また、暴力認識度は、コミュニケーション・スキル度と正の相関が、暴力許容度およびジェンダー意識度と負の相関がみられ、暴力許容度は、ジェンダー意識度と正の相関がみられた。さらに精神健康度は、コミュニケーション・スキル度と負の相関がみられた。

#### 10. 暴力被害の実態

暴力被害状況度の結果を図1に示す。恋人が現在または過去にいた348名中、恋人から暴力被害を受けた経験が一度でもあると回答した者は183名（52.6%）であった（以下、被害経験あり群と略す）。多かった項目は、「押ししたり、つかんだり、つねったりこづいたりする」28.4%、「相手の意見を聞かず自分勝手に決める」19.5%、「外出や友好関係をチェックする（携帯・メール等）」17.5%、「行動を制限または監視する」16.4%、「わざと嫌な呼び名で呼ぶ、バカにする、見下す」13.8%であった。命の危険を感じるほどの暴力を受けた人は3名（0.9%）であった。

#### 11. 暴力被害状況と各項目との関連

暴力被害に関連する要因との関係を表6に示す。暴力被害状況は、統計上「いつも」「ときどき」「たまに」と回答した者を「経験あり」とし、「まったくない」者を「経験なし」と2群に分けて検討を行った。

デートDVの知識と被害経験との関係について、「何を言っても無視をする」と「避妊に協力しない」の被害経験は、知識の有無と有意な関連がみられた。

被害経験あり群はなし群に比べて暴力に対する認識、暴力を容認する意識、ジェンダー意識度、精神健康度の4項目について以下のような特徴がみられた。

暴力に対する認識のなかの、「押ししたり、つかんだり、つねったりこづいたりする」、「行動を制限したり監視したりする」「わざと嫌な呼び名で

呼ぶ、バカにする、見下す」のスコアが有意に低かった。

暴力を容認する意識のなかの、「押ししたり、つかんだり、つねったりこづいたりする」、「外出や友好関係をチェックする（メールや履歴等）」、「行動を制限したり監視したりする」、「腹を立てた時、大声でどなる」、「わざと嫌な呼び名で呼ぶ、バカにする、見下す」のスコアが有意に高く、全体でも有意に高かった。

ジェンダー意識度では、「命の危険を感じるほどの暴力をされる」、「相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める」の項目で、有意に高かった。

精神健康度について、「外出や友好関係をチェックする（メールや履歴等）」、「行動を制限したり監視したりする」、「お金を貸しても返さない」のスコアが有意に高かった。

## 考 察

### 1. 暴力被害に関連する要因

デートDV被害を防ぐためには、現代の若者の暴力に関する意識やそれに関連する現状を知る必要がある。そこで、知識、暴力に対する認識や容認する意識、ジェンダー意識、およびコミュニケーション・スキルについて、検討した。

デートDVに関する知識について、柿崎と篠原<sup>17)</sup>は医学部保健学科の学生でデートDVについて「知っていた」と答えた者は全体の2割に満たなかったと報告している。今回、53%の者が「言葉も内容も知っている」と答え、知識を有する者が半数以上と多かった。今回の対象には、配布は主として看護学専攻および看護専門学校の学生を対象に行われた。看護系の大学では、講義でデートDVについて学ぶ機会が多く、調査結果に影響した可能性が考えられる。なお、調査票に学部や学科の記載を設けなかったため、教育効果と知識との関係については今後、検討する必要がある。

本研究では、暴力に対する認識について、「相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める」、「外出や友好関係をチェックする（メールや履歴）」といった相手を支配・服従する種類の暴力に対する認識は低く、学生は暴力を受け入れる傾向にあった。富安と鈴井<sup>1)</sup>も、青年期男女とも「身体・心理的暴力」や「性的暴力」に比べて、「支配・服従的暴力」項目の認識が低かったと報告し、今回の結果と類似していた。また、中岡と寺橋<sup>2)</sup>は、



女子大学生の社会的暴力に関する認識が低く、特に「携帯電話を無断で見る」といった行為を暴力だとみなさない者が半数以上であったと指摘している。本調査でも、身近なコミュニケーションの道具である携帯電話の認識が低かった。

暴力を容認する意識について、山本<sup>6)</sup>は大学生を対象に調査し、「相手からやられたら」「悪いやつをやっつけるためには」といった条件下で半数以上が暴力を許容したことを報告している。今回の調査でも、「しつけ目的として親が子どもに暴力をふるうのは仕方がない」など、山本の調査結果と同じ傾向であった。また、「軽くたたく程度なら、特に問題ない」が8割を占め、程度の軽いものは暴力とは認識せずコミュニケーションの一環として捉えていた。さらに、「行動の制限など、束縛も愛情表現の一つだと思う」と支配・服従的な内容も2割の学生は肯定していた。すなわち、暴力に対する認識と同様に、支配・服従的な暴力を容認する傾向が青年期の若者は高いと考えられる。

ジェンダー意識について、中岡と寺橋<sup>7)</sup>の調査と一部設問を変更したが、比較できる3項目をみると、結果に大きな差はみられなかった。「男は男らしく、女は女らしくふるまうべきだ」を肯定する者が33.0%、「女が家事・育児を担当するのがよい」を肯定する者が22.0%みられ、昔ながらのジェンダー意識を持つ者が存在していた。

コミュニケーション・スキルについて、関係維持や他者受容のスキルが高く、相手を尊重し平和に過ごせることを学生は重視していた。一方、表現力や自己主張のスキルが弱かった。表現力や自己主張することができないと、仮に被害に遭っても気持ちを表現せずに我慢する結果、暴力を受け入れてしまう可能性が考えられる。

精神健康度は、コミュニケーション・スキル度と負の相関を認めたことから、コミュニケーション・スキルを磨くことにより精神健康状態が改善される可能性が示唆された。また、精神健康度について、医薬系大学新生を対象にした先行研究<sup>16)</sup>では7.21%の者が13点以上であったが、今回は全体の28.4%と高く、3倍以上の学生が精神的に不健康な状態にあった。先行研究の対象が新生であったのに対して、本研究では新生以外の学年も対象にあり、試験や実習を経験する上級生も含まれていた。学年が進むにつれて、ストレス

も増え、精神健康面に影響したことが考えられる。

デートDVに関する知識や暴力認識度、暴力許容度、コミュニケーション・スキル、ジェンダー意識、精神健康度との関連性について検討した結果、暴力認識度は、コミュニケーション・スキル度と正の相関が、暴力許容度、ジェンダー意識とは負の相関がみられた。暴力に対する認識の高い若者は、暴力許容度が低く、暴力を許さず、ジェンダー意識も低い傾向にあった。一方、認識が低い人は暴力を許して受け入れてしまう傾向にあった。さらに、暴力に対する認識とコミュニケーション・スキルとの間に正の相関がみられた。前述したように、今回、対象となった青年期の若者は、表現力や自己主張のスキルが低い傾向にあった。今後、表現力や自己主張のコミュニケーション・スキルを高め、暴力を正しく認識し、一度被害を受けた時点で嫌なことは嫌と伝えることができるような教育が、デートDVの被害を防ぐために必要であると言える。

デートDVに関する知識は、暴力認識度およびコミュニケーション・スキル度と正の相関がみられたが、暴力許容度およびジェンダー意識度との間には弱い負の相関しか認められなかった。知識を得ることで、暴力の認識やコミュニケーション・スキルが上昇する可能性が示唆された。また、青年期の若者が暴力を正しく知り、認識することで、暴力を容認しない意識を高めていくことができると考えられる。さらに、ジェンダー意識と暴力に対する認識とは負の相関がみられ、暴力を容認する意識との間には正の相関がみられた。正しいジェンダー意識を持つことで暴力に対する認識が高まり、暴力許容度も下がると考えられる。中岡と寺橋<sup>7)</sup>は、性役割分業観が高く、逆に男女平等意識が低い者ほど、暴力を容認する意識を肯定する者が多いと述べている。柿崎と篠原<sup>17)</sup>も、性別意識が強い者は、デートDVを容認する傾向があると述べ、今回の結果と同様の傾向であった。被害への直接的な影響は低いものの、バランスのとれたジェンダー意識を持つことは暴力に対する正しい認識や、暴力を受け入れるのを防ぐことにつながると考えられる。

## 2. 暴力被害状況とそれに関連する要因

今回の調査から、デートDV被害状況について、暴力被害状況度のなかの一項目でも恋人から受けた経験があると答えた学生は183名(52.6%)で、

現在あるいは過去に恋人がいると回答した学生の半数以上が恋人から何らかの暴力被害を受けていたと推察された。内閣府の調査（平成23年度）<sup>2)</sup>では、「10歳代、20歳代の頃の交際相手から暴力を受けたことがある」という回答をした女性は13.7%、男性で5.8%にみられたと報告されている。今回の結果は、内閣府の結果に比べて経験者の比率が高かった。その理由として、今回、尺度として使用したのが婚姻関係にある男女における暴力、つまりDV用の既存のものではなく、交際関係にある男女間の暴力であるデートDVの先行文献を参考に作成したため、DVの尺度より比較的軽い項目が多く含まれているためであると考えられる。被害の多かった項目は、身体的なものでも「押しついたりつかんだりつねったりこぶいたり」という軽いもの、「相手の意見を聞かず自分勝手に決める」「わざと嫌な呼び名で呼ぶ、バカにする、見下す」といった精神的なもの、また、「外出や友好関係をチェックする（携帯・メール等）」「行動を制限または監視する」の社会的なものであった。

次に、暴力被害状況と各項目の関連について検討する。今回、知識があっても被害にあっていた者がいた。被害を与えた相手が現在の恋人か過去に付き合っていた恋人かどうか、また、被害を受けた回数などについて詳細な検討ができず、不明な点が多いが、デートDVに関する知識があるだけでは、被害を防ぐことは難しいと考えられる。被害を受ける者だけでなく、加害者となる者がデートDVの知識を得ることが被害の防止に重要であると思われる。

暴力に対する認識と被害状況との関連について、「押しついたりつかんだりつねったりこぶいたりする」「行動を制限したり監視したりする」「わざと嫌な呼び名で読んだり、ばかにしたり、見下したような言い方をする」の3項目のみ、被害経験あり群が暴力という認識が低かった。これらの項目は、愛情表現と表裏一体の関係にあると捉えることができ、認識するに至らなかった可能性が考えられる。

コミュニケーション・スキルと被害状況との関係について、「無理やり性的な行為をされた」以外では有意な関連がなく、また、被害あり群はなし群よりスキルが高いという結果であった。すなわち、スキルが高い者でも被害にあう可能性があ

ることが示唆された。被害を防ぐとともに、被害を繰り返さないためのコミュニケーション・スキルを高めていく必要があろう。

本研究では、多くの項目で、被害経験あり群がなし群に比べて暴力を容認する意識が高かった。一度被害を経験すると、「仕方がない」と受け入れるのか、それとも、暴力を容認する意識が高いから暴力被害に遭いやすいのか、今回の調査では因果関係までは明らかにできなかった。

ジェンダー意識との関係については、ジェンダー意識では12項目中の「命の危険を感じるほどの暴力をされる」、「相手の意見を聞かずに自分勝手に物事を決める」の2項目で、被害経験あり群がなし群に比べて有意にジェンダー意識度が高かった。DVを生み出す要因として、「男らしさ」「女らしさ」の性別役割に加え、男性優位社会があることが指摘されている<sup>18)</sup>。大学生に対する調査の先行文献で、ジェンダー意識と暴力を容認する意識との間に関連がある<sup>7)</sup>や、ジェンダー意識と暴力を容認する意識との間に差異がみられる<sup>6)</sup>などと報告されている。今回の調査では、前述の通り、ジェンダー意識と暴力許容度に関連がみられたが、ジェンダー意識と被害状況との関連性は一部の項目のみ見られた。

### 3. 暴力被害と精神健康度との関係

今回、暴力被害状況が、若者の精神健康度に及ぼす影響について、GHQ30を用いて検討したところ、被害状況と精神健康度との間に関連性があることが示唆された。また、暴力被害の類型別では、身体的・精神的・性的な暴力よりも、社会的・経済的な暴力の被害において、精神健康度への影響が強くみられた。デートDV被害は心身への深刻な影響をもたらすと言われており、中でも精神的・心理的な影響は、別れた後も長期的に続くことが知られている<sup>10)</sup>。今回、暴力だと明らかに認識されている身体的・精神的・性的暴力においては、精神健康度への影響が潜在化し、むしろはつきりと暴力と若者に認識されないと考えられる社会的・経済的な暴力において、精神健康度への影響が顕在化していた。「外出や友好関係をチェックする（メールや履歴等）」、「行動を制限したり監視したりする」、「何を言っても無視をする」といった比較的軽いとみられがちな被害でも、精神健康面への影響は想像以上に大きく、被害を受けた若者に対するケアが必要であらう。

本研究から、知識があっても暴力被害を防ぐことはできないが、暴力に対する認識や暴力を容認する意識が暴力被害に関連することが示唆された。暴力はよくないという認識を持ち、心身への影響についても伝え、暴力は自分が傷つくことから“受け入れてはならないもの”と感じられるような予防教育が必要である。また、実際に被害にあった時の対処方法や自分から早期に抜け出せるような具体的な行動についての教育が必要である。さらに、デートDVの加害生徒への対応も重要で、加害者は自分の行為を暴力と認識してではなく、愛情表現のつもりであったりする。そのため、加害者の行動変容をめざした介入も必要とされる。これらのことにより、完全に防止することは難しいものの、暴力被害をある程度減らすことができると考えられる。

本研究では、学生に対する心理面を考慮し、過激な表現の入った既存のDV尺度を使用せず、デートDVの先行文献を参考に作成したことで学生への記入のしやすさへの配慮はおこなえた。しかし、先行文献との結果の比較検討が行えなかった。被害経験の12項目において、被害の重みに差が大きいことと、1項目で1度でも被害にあってる者を被害経験者としており、被害の程度による比較検討を行っていないため、今後は、例数を増やしたうえで被害程度による影響も調べていく必要がある。

## 結 論

青年期における親密な関係の若者間の暴力の関連要因について検討した結果、以下のことが明らかになった。

1. デートDVについて、言葉も内容も知っている学生は半数以上であった。
2. 暴力被害を一項目でも受けた経験があると答えた学生は183名(52.6%)で、恋人のいる学生の半数であった。
3. 被害経験あり群がなし群に比べて暴力を容認する意識が高かった。
4. 被害状況とデートDVの知識、コミュニケーション・スキルとの間の関連は低かった。
5. 被害を受けた学生の精神健康度は、身体的・精神的・性的な暴力よりも、社会的・経済的な暴力のほうが、影響が強く見られた。

暴力はよくないという認識を持ち、心身への影

響についても伝え、暴力は自分が傷つくことから“受け入れてはならないもの”と感じられるような予防教育が必要である。

稿を終えるにあたり、懇切なるご指導とご校閲を賜りました鳥取大学医学部保健学科母性・小児家族看護学講座 鈴木康江教授、鳥取大学医学部保健学科母性・小児家族看護学講座 花木啓一教授に深甚なる謝意をささげます。また、本研究を行うにあたり、適切なご指導・ご助力を賜りました鳥取大学 前田隆子名誉教授に深謝致しますとともに、本研究にご協力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 富安俊子, 鈴木江三子. 青年期男女におけるデートバイオレンスの認識と性差間の相違. 母性衛生 2011; 51: 626-632.
- 2) 内閣府男女共同参画局. 「女性に対する暴力」に関する調査研究. 男女間における暴力に関する報告書(平成23年度調査) 2012. ([http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/h24\\_boryoku\\_cyouasa.html](http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/h24_boryoku_cyouasa.html))
- 3) McClellan AC, Killeen MR. Attachment theory and violence toward women by male intimate partners. J Nurs Scholarsh 2000; 32: 353-360.
- 4) Ehrensaft MK, Cohen P, Brown J, Smailes E, Chen H, Johnson JG. Intergenerational transmission of partner violence: A 20-year prospective study. J Consul Clin Psychol 2003; 71: 741-753.
- 5) 蓮井江利香. デートDVの防止教育に関する研究の展望. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 2011; 10: 116-124.
- 6) 山本功. 大学生の暴力観・DV観—首都圏大学生への質問紙調査から—. 淑徳大学大学院研究紀要 2005; 12: 321-324.
- 7) 中岡泰子, 寺橋侑希. 女子大学生のデートDVに関する調査研究. 四国大学紀要 A(人文・社会科学編) 2009; 32: 83-91.
- 8) 武内珠美, 小坂真利子. デートDV被害女性とその関係から抜け出すまでの心理的プロセスに関する質的研究—複線経路・等至性モデル(TEM)を用いて—. 大分大学教育福祉科学部研究紀要 2011; 33: 17-30.

- 9) 山田典子, 山田真司. 高校生のDating violenceの特性と課題. 母性衛生 2010; 51: 311-319.
- 10) 高田昌代. 【思春期とDV】デートDVとは. 思春期学 2010; 28: 195-199.
- 11) 野口康彦. 大学生カップル間におけるデートDVと共依存に関する一検討. 山梨英和大学紀要 2009; 8: 105-113.
- 12) 藤本学, 大坊郁夫. コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究 2007; 15: 347-361.
- 13) 相川充, 藤田正美. 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成. 東京学芸大学紀要第1部門 2005; 56: 87-93.
- 14) 町田佳世子. コミュニケーション遂行能力とストレスフルなコミュニケーション課題対処能力の関連. 北海道東海大学高等教育研究 2007; 2: 29-36.
- 15) 中川泰彬, 大坊郁夫. 日本版精神健康調査票手引. 東京, 日本文化科学社. 1985.
- 16) 酒井渉, 松井祥子, 四間丁千枝, 高倉一恵, 島木貴久子, 佐野隆子, 舟田久. 医薬系キャンパス新生の精神的健康状態に関する調査研究. 学園の臨床研究 2010; 9: 37-46.
- 17) 柿崎美里, 篠原ひとみ. 大学生におけるデートDVに対する認識と性差観との関係. 秋田県母性衛生学会雑誌 2008; 22: 23-29.
- 18) 山口のり子. DVの現状・要因とDV対策の課題. 看護 2010; 62 (13): 66-70.